

佑 啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

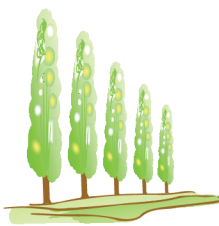
FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

つながる思い

山口 喜男

千葉県には障害者の相談に応じる各種の専門支援機関があります。その中のひとつとして千葉県地域定着支援センターがあります。皆さんご存じでしょうか。多分、福祉関係者の方は名称を耳にしたことはあると思いますが、その詳細は「ちよつ」という方がほとんどかもしませんが、その活動内容を紹介します。



平成二十一年度に厚生労働省が創設した「地域生活定着支援事業」という障害者の支援施策がその根幹となっています。ちよつと硬くなりませんが、その概要は「矯正施設入所者の中には、高齢又は障害により自立した生活を送ることが困難であるにもかかわらず、過去に必要としない人が少なくなく、また、



親族等の受入先を確保できないまま矯正施設を退所する高齢者、障害者も数多く存在していることが指摘されています。このため福祉的な支援を必要とする矯正施設退所者について、退所後直ちに福祉サービス等につなげるための準備を、保護観察所と共同して進める地域生活定着支援センターを都道府県に整備することにより、その社会復帰の支援を推進することとしています。という内容になっています。

なぜ、地域生活定着支援かと言うと、定着支援センターが主催する研修に参加し、色々考えさせられる事があるからです。個人の希望だけでなく、なかなか矯正施設の見学ができる機会などめったにあることではありません。他の職員の希望も多くあったようですが、理事長に直談判し、参加が叶いました。ここで千葉県地域生活定着支援センターの活動状況にふ

れてみます。千葉県での設置は平成二十二年十月から千葉県知的障害者福祉協会が設立したNPO法人生活サポート千葉が千葉県の受託事業として活動しています。この法人の理事長は里見理事長ですが、佑啓会職員はいわば兄弟のようなものでしょうか。そんなことをいつて兄貴風を吹かしています。しかしながら、福祉協会加盟施設は正会員となつて運営から経費までその屋台骨を支えてくださっています。つまり、協会をあげて支援している事業のひとつです。



前置きが長くなってしまいました。去る梅雨明けの猛暑日に千葉駅近くに準備されたバスに私とS支援員は乗り込み見学先に向かいました。矯正施設とは刑務所・少年刑務所・拘置所・少年院があり、



罪状や刑期に応じた施設に収監されるようです。昼食時、S支援員曰く「やはり鉄格子なんでしょうね」とか「塀もかなり高いんでしょうね」とテレビの刑事物にあるシーンを思い浮かべていたんでしょう。いざ到着してみると、閑静な住宅街の一面にあり矯正施設とは思えない存在でした。

娑婆から塀の中に入る感じは全くありませんでした。係の方の案内で全員会議室に着席、人数の点呼を受けた後に説明を受けることになりました。過去に罪を犯した訳ではないのですが、ちよつと緊張が走ります。しかし、職員を束ねる組織のトップは姿勢正しく凛とした女性でした。「罪を償ったあとの方が重要で皆さんの力を是非貸してください」と思いのこもったご挨拶でした。施設の概要をお聞きした後見学に移ります。制服に帽子を着用し行動も機敏な次長の後に続き管理棟から居住部門に入ります。これが塀の中への入り口で、ここからはすべて厳重に管理されています。中庭にある桜の幹の太さが歴史を感じさせ手入れも行き届いていました。古い建物ではありますが、掃除

は行き届き修理や保全の扱いが丁寧でした。教育訓練部門での各種療法に関する説明を聞くうちに、日常の苦労やその真意が伝わり職員の皆さんの距離が近くなったような気がしました。この日はひときわ暑く見学が終わる頃には吹き出る汗が止まらないほどでした。しかし、冷房設備は管理棟のごく一部に設置されているだけで、厳しさの一面をのぞかせる部分でもありました。



冷えた会議室に戻った後に刑期終了後退所してゆく過程を聞くこととなります。障害を持つ多くの受刑者は、環境さえ整っていれば罪を犯すこともなかったし、早期に救いの手段があればここに来ることは無かったのではと強調されています。環境を整える大切さは施設でも同様で個々の状況に応じた調整を行うことが最大の仕事と理事長はケース会議でよく話しています。

さて、刑期中に色々な教育を受けても元の環境に戻れば意味も無く、帰るあてがなければ再犯率は高くなるを得ない。わかっているにも刑期が終われば出さしかなない現状がどうです。しかし、特別調整での定着率は八十五%以上で福祉関連施設がしっかりと



した受け皿となっていると高い評価を受けていました。それだけにつなぐ思いは真剣でした。研修参加前の矯正施設職員へのイメージは「厳しく冷たい」ものだと想像していましたが、個々の将来を真剣に心配し奔走していることを知り驚きました。参加者の多くは相談支援事業者と施設関係者でしたが、多分その感想は皆同じだったと思います。

今、福祉サービスの利用には特定相談支援事業者のサービス等利用計画書が必要となります。その理由は福祉サービスを適切に利用することができるようになることですが、まさに、相談支援事業者の質が問われることとなります。標準事例に当てはめるだけで済むケースばかりではありません。アセスメントに関する能力が試されていくはずで、それぞれの機関のつなぐ思いを受け、相談支援事業者は次の機関にその思いもつなぐ重要な役割を担い、その責任をしっかりと自覚しなければと再認識させられた研修となりました。今後の研修にも期待しております。

(ふる里学舎和田浦施設長)

なお、専門用語で取り扱いが間違っておりましてらご容赦ください。

真大、ありがとう

阿部 葉子

平成三年十一月十八日に阿部家に待望の長男が誕生しました。難産の末、やっと産まれてきた真大は、泣き声も弱々しく、ミルクの飲みも悪く、重度の黄疸症状があり、即救急車で運ばれ入院。心配で心配で、人目もはばからず号泣しました。



様々な病気の疑いがあり、検査の連続。最終的に生後六ヶ月の時に脳性巨人症という病気の判定。「えっ?何?脳性巨人症って?」さらに「発達遅れ、知的障害を伴います」というお医者さんからの衝撃の言葉・・・

その時は、真大がお腹にいた時に何か悪い物を食べたのか、母親として自責の念にかられる日々でした。そして発達の遅れが顕著に現れた頃になると、「どうやって人目に触れず、隠して育てようか」などと恐ろしいことを考えたりして、今思つて信じられません。

しかし、いきなり、「はい、障害があるけど育てなさい。」という状況になって、何もわからず病院に行つても治療はななく、どこに頼るかの術を知らず、不安いっぱいの中、真大を抱っこして暗い家の中で泣いていた日々でした。今思い返すと、最も不安で最も孤独な中での子育て時期だったような気がします。

しばらくして、障害の子どもの集まりがあるから来てみないかと保健所からのお誘いがあり、同じ境遇のお母さんたちと初めて話して、分り合えることにとても救われました。また、障害のある子ども達への様々な障害福祉サービスの存在があるという事も初めてわかりました。

めでわかりました。

それから、ママ友ができ、外へ外へ出て行くようになり、真大の満面の笑みに支えられながら、普通の子と同じ経験させてあげたいと、やっと前向きな気持ちになってきた頃でした。そして、きつとこのお母さんも思つておき、少しでも障害を軽くしてあげたい、何か突出した才能があるのではと考えるといつことを、私も真大の幼少期々齢期は、まさにそのことに猪突猛進していました。週五日生きてや勉強に通っていました。真大が生き延びるやうな力になって表れているか分りません。私は無駄ではなかったと思つています。それは真大だけではなく、私ちだくさんの出会った先生方やお母さんたちから多くを学んだということでも忘れられないからです。

そんな二人三脚でママを独占していた真大(当時は小学一年生)に突如、弟が誕生してきたから大変です。赤ちゃんとやり取りはしてはみましたが、一緒に哺乳瓶でミルクを飲み、離乳食も一緒に食べ・・・記憶が定かではないですが、全て同じようにしてあげました。そうしないと怒って大変でした。それから弟が歩き、話せるようになると、やきもちが始めました。家の中がどうしたら落ち着いて過ごせるかと毎日それはかり考えていました。弟が怪我をしないようにヒヤヒヤでした。



その後、思春期を迎え家の中だけではなく、やはり真大自身が不安定で、学校などでも問題行動等があり、真大も私も大変困難な頃だったような気がします。

その時に思っていたことは、私達がいなくなっても、社会に受け入れられるような子になって欲しい、一緒にいて

て楽しい、一緒に生活していきたいと思われ、何とか嫌われないで世の中に受け入れられるような人になって欲しいと漠然と願つばかりでした。とにかく外に出て、社会性を少しでも学べればと、地域の様々な福祉サービスを利用し、たくさんの人と関わり、支援を受け、色々な経験をしました。

そんな時にある里学舎に出会い、市原の方へ相談させてもらいました。見たこともない素晴らしい施設に感動して、まだ私の相談にも親身にのって下さり、心が軽くなったことを今でも記憶しています。次に和田浦を見学させていただき、またまた、見たこともない素晴らしい施設と自然環境の良さに感動しました。夏に合宿があるとお聞きしたので、さっそく申込み、体験。その時の合宿中の写真をいただき、真大が笑顔で参加している様子にとっても嬉しかったこと、写真を撮って下さるという心遣いに感謝の気持ちで一杯でした。その後、ご縁あって、入所させていただくことになりました。

もつと二十歳の真大は幼児期からそんなに性格は変わっていないように思いますが、人が大好きで、喜怒哀楽がはつきりしていて(怒が多すぎて困りますが・・・)、色々と問題行動も多々あり、申し訳ないと思っておりますが、学舎の職員みなさまがのびのびの真大を受け入れて下さり、親子共々支えて下さり、感謝の気持ちで一杯です。帰省や帰舎の時にはいつも抵抗している真大ですが、和田浦に到着してお友達や職員さんたちの顔を見ると一変!笑顔になります。真大も学舎が大好きなんだなと思う瞬間です。私達の帰る車を見送る真大・・・「ほくもみんなと仲良くがんばるから、ママも元気でね」そんな気持ちなのかなと感じます。私も心の中で「大好きだよ真大!明るく元気な笑っているんだよ」とこんな親子ですが、どつぞこれからよろしくお願ひ致します。

(和田浦入所 阿部真大さん母)

初夏の愉楽

並木 傑

機関紙佑啓では、過去に様々な職員の福利厚生行事に触れていますが、今回は『四法入交流会』について紹介したいと思います。

この行事の歴史は古く、約二十年前にわたる里学舎と施設長同士が知り合っただけで成り立ちのしるしを学舎と職員交流会が原点です。

その後、船橋市の大久保学園、香取郡の北総育成園を加え四施設となり、施設規模の拡大に伴い名称も四法入交流会に落ち着き現在に至ります。幹事は毎年持ち回りで、担当法人が当日のセッティングを全します。今も昔もメインはバレーボールと宴会ですが、それ以外にもリレーや綱引き等のスポーツ部門や、宴会の中盤に行うのど自慢大会や余興の披露など、内容は盛りだくさんです。全てに加点があり、合計点で順位を競います。それだけ聞くとわいわい楽しいイベントに思えるかも知れませんが、この行事は困ったことにチーム総監督である施設長が揃つて(全員)負けず嫌いであること。その上、噂ではこの行事の結果がその後の一年間の施設長の力関係に少なからず影響が出ているとか・・・その為、バレーでの敗北や余興のズベリは、職員にとっては笑って済ませられる問題ではありませぬ。どの法人も毎年、勝利後の天国と敗北後の地獄を知っているベテラン職員の指揮の元、何ヶ月も前からバレーやスポーツ、余興に専念した練習を重ねます。

そして四年に一度の幹事になった年といったらそれはそれは一大事。今年には当施設が幹事で私が実行委員の一人に任命されたわけです。実行委員会のメンバーが決まり次第、すぐに部門ごとに担当を決めます。そして普段は忙しい理事長にも調整していただき栄養士、看護師まで巻き込み、何度か打ち合わせを重ね、料理のメニューや競技内容、職員の動き等を細かい部分まで

詰めながら準備を進めていきます。

去年の幹事施設はこういことをやっていただけはこまやかでやろうと、ある意味意地の張り合いになっているのは否めない事実であります。交流会の内容だけではなく、施設内や周辺の環境整備についても妥協せず、こんなところ絶対に見えないだろうといったところでも、職員総動員で草刈りや掃除を徹底的にやります。そうして、あつという間に当日を迎えます。週間予報ではずつと雨でしたが、前日になり晴れに変わりましたが、天気の良い朝でした。朝七時半に集合のころ、時間の前から競技の一つであるニアビンの練習をしているY部長の姿を見た瞬間には鳥肌が立ち、勝利を予感させました。

朝一番で行ったバレーボールは、選手だけでなく全職員がむしやに声を出して応援をします。飛び抜けて強いチームはなく、どの試合も実力が拮抗していました。完全優勝を目指していましたが、セット数の関係でふる里学舎は二位という悔しい結果になりました。その後はスポーツの部へ。今年の競技はゴルフのニアピン、長縄跳び、PK、綱引き、リレーの五競技で、ほとんどの競技でふる里学舎が一位を獲得することができました。

夜は待ちに待った宴会になります。今年は総勢三百二十名でした。職員同士も顔見知りが多いので四法人の職員入り乱れての大宴会となります。ふる里学舎名物の海鮮バーベキューに厨房の手作り料理に皆さん満足して頂けたようでした。のど自慢では各施設代表の上手な歌声に癒やされ、宴会のメインともいえる余興の時間となります。余興の内容については、あまりにくだらなかつたり、少し過激だつたりするのでこの場では割愛させていただきます。全ての種目を終えての結果発表、今年には見事三年振りの総合優勝を勝ち取ることができました。

お客様が帰つたら当然のことながら打ち上げとなるのがふる里学舎の通例です。集合時間から考えたら何時経過しているのか分からないぐらひの長丁場ですが、この時間が楽しみで何ヶ月も前から頑張っているようなものなので、みんな元気にあだだこうだとい日を振り返りながら美味しいお酒を飲みました。



真田 亜由美

編集後記

(ふる里学舎 支援員)

各地で異常気象が続く、記録的猛暑やゲリラ豪雨の話題がニュースで流れます。南房総も例外ではなく、連日の猛暑・・・と思つていたものの、ひとたび市原の施設を訪れると、まさにうだるような暑さ。南房総には爽やかな海風が吹いています。

夏休みともなれば、たくさんのお客さんが訪れにぎわいを見え、昨年和田浦道の駅「W.A.O」がオープンし、地元野菜やお土産ももちろん和田浦のジャムや塩も大盛況。南房総にお越しの際はぜひお立ち寄り下さい。そんな活気溢れる和田浦から、佑啓八十五号をお届けします。